義のために迫害されている者　　マタイ５章１～１２節

義のために迫害されている者は幸いです。天の御国はその人たちのものだからです。
マタイ５章１０節

キリスト教会にとって、最もなじみ深いことばの一つは「迫害」です。
キリスト教会の歴史は、迫害の血で染められています。
イエス様は、ご自分に従う者に安楽な生活を約束されませんでした。
邪悪な世の中は、神様の義に生きる者を見逃しません。バプテスマのヨハネは殺されました。イエス様も十字架につけられました。使徒たちも、迫害されていのちを失いました。
パウロはテモテに言いました。(第二テモテ 3:12)「キリスト・イエスにあって敬虔に生きようと願う者はみな、迫害を受けます。」
確かに、迫害は誰でもが嫌がり敬遠します。　なければない方がいいに決まっています。
しかし、イエス様は約束されました。「義のために迫害されている者」には、永遠の御国「天の御国」の市民となる事が約束されていると言われました。

さて、山上の説教の 8 番目の、「義のために迫害されている者」の幸いは、実は一番初めの「心の貧しい者」の幸いと、本質的には同じです。どちらも「天の御国はその人たちのもの」と、同じ祝福が約束されています。

さて、11、12 節は 10 節の説明、展開です。「わたしのために人々があなたがたをののしり、迫害し、ありもしないことで悪口を浴びせるとき、あなたがたは幸いです。喜びなさい。大いに喜びなさい。天においてあなたがたの報いは大きいのですから。・・」
いままでは、イエス様は三人称で「彼らに教え始められた。」(5:2) と呼びかけて来られましたが、ここからは二人称「あなたがたは」と、親しく呼びかけておられます。
この様にしてイエス様は、やがて弟子たちが直面すると思われる迫害について、教えておられるのです。
皆さんは、迫害を経験されたこと、ありますか？　イエス様は、主の祈りの中で (6:13)「私たちを試みにあわせないで、悪からお救いください」と、祈るように教えています。ですから、試みにあわない方が確かに良いのです。でも、神様の正義を大切にして、その中で生きようとすると、世との摩擦は必ず起こると思います。
いやがおうでも、世との戦い中に入っていかなければなりません。

―――　この世との、関係・・　―――

さて迫害について、私たちと、この世との関係について考えてみましょう。
私たちは次の 3 つのどこかに属していると思います。

・第 1 は、義のために迫害された生活。
・第 2 は、義のためではないが迫害されている生活。
・第 3 は、迫害のない生活です。

――― 義のために ＝ イエス様のために ―――

さて、ここで「義のために」（10 節）とは具体的にどういうことでしょうか？

11 節でイエス様は「わたしのために」と言っておられます。ですから「義のために」とは、イエス様の事なんだと言う事がわかります。

ですから、ここは「イエス・キリストのために迫害されている者は」（10 節）と、理解すべきですね。

さて、この世とイエス様を信じている私たちとの関係を考えましょう。

・第 1 は、 イエス・キリストのために迫害される生活です。

（第 2 テモテ 3:12)「キリスト・イエスにあって敬虔に生きようと願う者はみな、迫害を受けます。」

迫害されるのが好きな人は、まずいないでしょう。しかし、残念なことに、昔から神様に従った人、神様と共に歩んだ人の多くは、迫害されてきました。

・あのダビデ王は、常に神様に従った人でした。彼の行く所、どこも全て勝利でしたが、、それをサウル王にねたまれて、いのちを狙われました。
・預言者エリヤは、王の罪をあばいたために、アハブ王に脅迫されました。
・エレミヤも神様のことばをはっきり語ったために、牢に入れられました。
・あのダニエルの友人たちは、ネブガドネツァル王の金の像を拝まなかったために、燃える炉に投げ込まれました。
・更に初代教会のクリスチャンたちもそうでした。ペテロ、ヨハネ、ステパノ、パウロ、ヤコブたちも皆、迫害されました。それにしても、教会の歴史は今まで、ほとんどは迫害と殉教の歴史でした。

実際に、312 年、ローマ皇帝コンスタンチヌスがキリスト教に改宗するまで迫害と殉教は続きました。日本でも、豊臣秀吉のキリシタン禁令（1587 年）以来、250 年間に殉教した者は、約 20 万人と言われています。

でも、これらキリシタンたちは、「たとえ肉のいのちは奪われても、魂までは奪われない」と確信して、喜んで十字架に上って行きました。

これらの人々は幸せでした。なぜなら、その迫害は、彼らがみんな天国の市民である事を証明したからなのです。

さて、この世と私たちクリスチャンとの関係です。

・第 2、一応イエス様を信じている方で、よく迫害されている方です。。

すでに洗礼を受けてイエス様を信じてはいるのですが、よくトラブルを起こす人です。「私はイエス様を信じているので迫害されています」とよく訴えて来られます。

こんな出来事がありました。ある高校生。「先生、私は家で両親から迫害を受けているので、祈って下さい。」みんなで祈りました。そんなある日、その家に電話をしました。母親が出ました。「～ちゃん、電話よ！」「誰からよー。うるさいなー。いないと言ってよ。こんな時に。」　「教会の先生からなのよ。」「わー、先生・・、私です。」実は、この家で、一番だらしない生活をしていたのは、トラブルメーカーだったのは、教会に来ていた彼女だったのです。彼女は教会に行くと行っては、それを口実にして家の中では、掃除も、洗濯も、後かたずけも、何もしなかったのでした。　私たちは、自らを欺いて、自分を正当化するために、この様な事をしない様に気を付けましょう。　さて、この世と、私たちの関係です。

第 3、迫害のない生活です。

これもまた、考えものです。きよい生活をしないで、この世と妥協し、すべてに中途半端、礼拝も適当。サタンから喜ばれている様な生活をしていては、確かに迫害はありません。でもこれでは、悲しすぎます。サタンは喜んでいても、イエス様は泣いています。そう考えると私たち、もう少しは義のために迫害されてもいいのではないでしょうか？　少し皮肉かも知れませんが・・・。

さて、この第 8 番目の山上の説教のお話は、次の節の (13 節)「あなたがたは地の塩です」(14 節)「あなたがたは世の光です」に、つながっている様に思われます。「あなた方は地の塩、世の光の様に生きて欲しい」と、その事をイエス様は願っておられるのです。

――― 山頂を征服した時の、登山家の喜び ―――

さて、「義のために迫害されている者はさいわいです。」と語られた後に、イエス様は次の様に言われました。(11、12 節)「わたしのために人々があなたがたをののしり、迫害し、ありもしないことで悪口を浴びせるとき、あなたがたは幸いです。喜びなさい。大いに喜びなさい。天においてあなたがたの報いは大きいのですから。あなたがたより前にいた預言者たちを、人々は同じように迫害したのです。」この意味はこうです。

「迫害は受けるだけでは、意味がありません。実は、迫害は悲しみ、嘆きの時ではなく、むしろ喜びの時なのです。・・・」「喜びなさい。大いに喜びなさい。」イエス様は「喜び踊りなさい」と言われています。これは「喜びなさい！」というイエス様からの命令なのです。

この喜びは、経験された方はわかると思いますが、山頂を征服した時の登山家の喜びにも似ています。頂上を勝ち取るには、必ず労苦が伴います。でも頂上に立てば、すべてが報われるのです。

イエス様はここで、地上で迫害された時の喜びの理由を、2つあげています。
・**一つ目**は、天においてあなたがたの報いは大きいから。
・**二つ目**は、昔の迫害された預言者たちの栄光と交わりの中に入ることができるから。

・その**一つ目**ですが、イエス様は、天の御国で、「忠実な良きしもべよ、よくやった！」と言って、**主自ら、あなたの目の涙をぬぐってくださいます**。御国で、すべてが報われます。

こんな話があります。ある国で戦争が終わり、多くの兵士が帰って来ました。中にはたくさんの勲章をぶら下げている者もいました。でも、一人の老人が言いました。「我が祖国のために一番働いてくれた者は、一番負傷した者なのだ・・。彼らこそが我が国のため命をかけて愛してくれた者たちである」
イエス様も、あなたの心の傷跡を、しっかり見ておられます。
果たして、私たちは今まで、この地上で神の正義のための戦いをして来たでしょうか？
私たちはイエス様から、ぬぐってもらえる涙が果たしてあるのでしょうか？
私たちは今、天の御国で報われるような生活をしているでしょうか？
私たちこの世で、すでに全部報われているような生活していないでしょうか？
（使徒 5:41）あの、使徒たちは、最高法院で、ムチ打たれ、脅迫された時に「御名のために辱められるに値する者とされたことを喜びながら、最高法院から出て行った。」のです。
そして、宣教の場に、向かって行ったのです。
（使徒 16:19～25）「真夜中ごろ、パウロとシラスは祈りつつ、神を賛美する歌を歌っていた。ほかの囚人たちはそれに聞き入っていた。」パウロとシラスは、ムチ打たれ、その傷が痛んでいる時に、牢の中で主を賛美しました。

・その**二つ目**。「たとえそうでなくても」の作者「安（アン）イスク師」の証から学びます。戦時中、安師はキリスト教信仰を捨てない理由で、日本軍によって牢に入れられました。その牢の中で、アン師は、今まで会う事も出来なかった、でも心から尊敬していた、多くの牧師先生方が、自分と同じ牢の中に入れられていることを知りました。彼女は、今自分が、その様な偉大な先生方と、同じ所に入れられている事に、自分もこの方々と同じ同労者とされて事に、心からの感謝、喜びを主に献げたのでした。獄中は、彼女にとって天国でした。
私たち、やがて行くべき御国に焦点を合わせて、この地上を歩みましょう。
私たち、この地上での、自分自身の使命を、自覚しつつ、この地上を歩みましょう。
神様が、あなたに期待されている、そんな道を共に歩みたいものですね。

イエス様のことばです。（5:10 節）
「義のために迫害されている者は幸いです。天の御国はその人たちのものだからです。」